

J. - J. Rousseau を読解する

—序説—

久 富 健

『我それ自体というものは存在しない。
存在するのは ただ根元語・我—汝にお
ける我と、根元語・我—それにおける我
だけである。』⁽¹⁾—Martin Buber—

1) 予備的考察

ある文学作品を前にして、個人的読解を進めていく時、人は何を読みとり、どういう感動を受けるのだろうか？ その作品がどんな種類のものであろうとも、文学が文学であるためには「作者→読者」という基本的関係の中で、想像力の橋わたしとして「読解」は成立するのである。読むという行為は、作者からのメッセージと、読む側の人間の思想及び感情との対立ともいえるのである。哲学者デカルトは『方法序説』の中で次のように言う。

..... la lecture de tous les bons livres est comme une conversation avec les plus honnêtes gens des siècles passés, qui en ont été les auteurs, et même une conversation étudiée en laquelle ils ne nous découvrent que les meilleurs de leurs pensées⁽²⁾

「すべての良書を読むことは、それらの著者であるところの、過去の時代の最もすぐれた人々との、いわば談話であり、しかも彼らがその思想の最上のものをわれわれに示してくれる、よく準備された談話であること。」(傍点筆者)

つまり「読解」とは、単に「文字のある風景」を眺めることなく、作者の創造した世界へ接近し、そこに構築された言葉の空間を辿ってい

くことなのである。デカルトの説明によれば、その行為が「談話」*conversation*ということになる。読み手側は、想像力という因子によって、感情や思考に伝達される内容を受けとめていく。日常、私達が、なにげなく「読んでいる」時にも、この読解は、純粹な意味で持続されていかねばならない。

作者の創造した言葉の空間とは、一体何んであろうか？ それは、形式的には文章をつみかさねていくことでしかない。要するに、「文体」*style*であり、作者の詩的想像力と文才によって計算されたものである。私達は、その文章の集合を読みとることで、作品の内部へ入りこんでいく。内部には、小説であれば「筋立て」や「プロット」があり、作者のテーマが浮かびあがってくる。私達は、作者の文体をすばやく感知しつつ、作品の内部と反応し、テーマを理解していく。これが、読解のプロセスではなかろうか。

言語学上の概念で考えるならば、読解のプロセスとは、*denotation*（外延または明示的意味）と、*connotation*（内包または暗示的意味）の二つの側面から成立していると思う。唐突な用語かもしれないが、意味論的に拡張してみると、*denotation*が、作者が表現したもの（文体）を意味し、*connotation*が、作者の深層からのメッセージを示している。前者は、表現として明示されているが、後者は、言外の意味として暗示されている。つまり、この二重構造の中に、読解の本質があるといえるであろう。「眼光、紙背に徹する」という読書態度こそ、実は、*connotation*を読みとることにちがいない。

しかしながら、私達は「読解すること」によって、論理や感情を理解することだけではなく、作者の世界を追体験しているのである。ひとつの作品、たとえばドストエフスキーの『罪と罰』にしろ、ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』にしろ、小説の中へ埋没する読解でなければ、作者の意図なりテーマが理解できるはずはない。読み手が、追体験していく

ことで、そこに見えてくる世界——ドストエフスキーの文体の息づかい、ジョイスの表現力の確かさなど——を読みとっていく。文学者の創造した作品は、読み手によって再現され、体験のひとつとして私達の感性と思想に影響を与えるのである。

「読解」とは、文学におけるあまりにも重要な行為そのものであり、広い意味では、読み手側の自由を保証するものであると思われる。

2) Rousseau に向って

私のこの小論では、読解のひとつの具体例として、18世紀仏文学における著名な作家、Jean Jacques Rousseau にスポットをあててみることにする。私にとって、この文学者は読解の過程で常に何らかの精神的興奮を与えるのであり、その偉大な多様性ゆえにいつも読むごとに新しいものを発見できる。

日本人には馴染み深いこの作家は、周知のごとく、1712年に生まれ、フランス大革命以前のアンシャン・レジーム（旧体制）の中で生きぬき、いわゆる啓蒙思想期の代表的思想家の一人である。18世紀フランスは、歴史的にはルイ14世の絶対主義体制がいきづまり、革命前夜の激動期であった。その中で、ルソーは、1750年、デイジョンのアカデミーの懸賞論文課題、「学問と芸術の復興は、習俗の純化に寄与したか？」に応募した。これが見事に当選し、一躍有名になった。この『学問芸術論』⁽³⁾は、第一論文と呼ばれ、彼の著作活動の出発点となった作品であった。論文としては短いが、彼の思想体系の萌芽的なものといえる。その後、ルソーは、1778年、66才で死ぬまで、次々と重要著作を発表していった。第二論文『人間不平等起原論』⁽⁴⁾（1755年）、『新エロイズ』⁽⁵⁾（1761年）、『社会契約論』⁽⁶⁾（1762年）、『エミール』⁽⁷⁾（1762年）……などを続けざまに出版し、当時の人々にセンセーショナルな影響を与えていた。『エミール』が官

憲に押収され、逮捕令が下りてから、ルソーは、各地を転々とし、1770年代以後、孤独な人生を送り、一種の被害妄想に悩まされていた。この時に、自己弁明の意味で死後出版された一連の自伝作品を書きつづけていた。『告白』⁽⁸⁾に始まり、『対話』⁽⁹⁾、『孤独な散歩者の夢想』⁽¹⁰⁾などの作品群である。近代文学における自我の問題は、実は、ルソーのこれらの作品から出発していると思われる。

多面的な作家であるルソーは、決して、「自然に帰れ」というような単純な図式では描くことはできないのである。文学史家のG.Lansonは、次のごとくルソーをとらえる。

Ainsi Rousseau nous prend par toutes nos facultés à la fois: en politique, en morale, dans la poésie, l'éloquence, le roman, on le trouve partout, à l'entrée de toutes les avenues du temps présent.⁽¹¹⁾

「こうして、ルソーはありとあらゆる活動力によってわれわれをとらえる。政治において、道徳において、詩において、雄弁において、小説において、ひとはいたるところ、現代に通ずるすべての道の入口に彼を見出すのである。」

私自身、ルソーをめぐって、その全体のイメージをとらえようと検討してきたのだが、Lansonのいうごとく、ルソーの思想のあり方は、すべてのジャンルに問題提起をしていくか、または、疑問を投げかけていく姿勢を基本にしている。それは、一つの画一的体系をめざすのではなく、個々の問題を常に〈自己〉と対立させて、体制として構築された伝統的文明に向って、アンチを唱えていく態度なのである。いわば、反文明の哲学者ルソーといえるのである。「考える前に感じた」人であるルソーは、その直観力と詩人的感性をもって教育原理(『エミール』)を論じ、社会及び政治(『社会契約論』)を論じ、そして、自己のありのままの姿(『告白』)を発表したのであった。

ルソーの歩んだ一生を、事実と人間関係の中で追求していくと『告白』には書かれていない姿が浮び上ってくる。例えば、彼の書簡集⁽¹²⁾などを読むと、時に怒り、時に悲しみ、意外と二重人格的な性格が随所に見い出される。16才で、ジュネーブを逃亡し、独学で教養を得て、自己矛盾をかかえつつ、38才の時、『学問芸術論』で一躍有名になり、その後、結局自己弁護のために『告白』を書かずにいられなくなった。彼の生きざまは、実に放浪者のそれに近い。こんなルソーの現実存在を、私が想起する時、ひとりの人間としてのルソーに共感し、また感動せずにはいられない。

卓抜なルソー論で知られているJ. Starobinskiは、次のような見方をしている。

Rousseau désire la communication et la *transparence* des coeurs; mais il est frustré dans son attente, et, choisissant la voie contraire, il accepte – et suscite – l'*obstacle*, qui lui permet de se replier dans la résignation passive et dans la certitude de son innocence.⁽¹³⁾

「ルソーは、心の交流と透明とを欲している。が、彼は期待を裏切られ、反対の道を選び、障害を受けいれ—かつそれをひき起こす。障害によって、彼は受動的な諦めのうちに、みずからの無垢の確信のうちに身を沈めることができるのだ。」

Starobinski の書いたルソー論、『透明と障害』は、その精神分析的方法論を基本にした見事なものである。ルソーの世界を、言語化された作品を通じ、内的分析を試みたのである。伝記的記述を避け、斬新な手法でルソーの全体像を示した。この研究は、最近のルソー研究の中で最も重要であると思われる。

この小論では、ルソーの全体像について言及する余裕はない。前述した「読解」の行為を通じ、ルソーの世界へ接近しつつ、私自身に映じた

ルソーの「内部」を追求していく。いみじくもルソーは、次のように読者へ呼びかける。

Je conçois un nouveau genre de service à rendre aux hommes: c'est de leur offrir l'image fidelle de l'un d'entre eux afin qu'ils apprennent à se connaître.⁽¹⁴⁾

「私は人びとに報いるべき新しい一種の奉仕を心に抱いている。それは、人びとがみずからを知るということを学ぶために、人びとのうちのひとりの人間の忠実な姿(イマージュ)を提供するということである」

3) 読解：『告白』から『夢想』へ

ルソーの「内部」へせまっていく試みとして、やはり、彼の自伝的諸作品に着目すべきであろう。『告白』などの作品の他に、膨大な書簡集、数々の自伝的断章など、いわゆる自己をめぐる告白的テキストが、私自身の読解の資料として目の前にある。数多くのルソー研究家が、今までに提出してきたルソー論を無視することはできない。しかし、私自身のルソー解釈は、地道な原文テキストの読解を基本としなければならない。⁽¹⁵⁾ Pléiade 版のルソー全集第1巻(自伝作品集)の1ページ1ページを読むこと。——そして、次々と私の胸に浮んでくるルソー像を求めること。——この小論では、そのイメージを少し整理しつつ紹介しよう。

ルソーの記述したこと(denotation)の内容が、すべて現実のジャン・ジャックであると考えるのは間違っている。自画像として正確ではあるけれども、やはりルソーの主観を通じた解釈であり、記憶を想起しつつ、事実と嘘を混ぜながら表現していると考えべきである。勿論、ルソーの「内部の事実」が混乱していたことも確かである。自己と自己をめぐる環境についてこれほどまでこだわり、『告白』という一大回顧録にとどまらず、自己への埋没が著しい形であらわれている。何故、ルソーはこ

のような形で自分を語らねばならなかったのか？ 迫害されるという妄想があったとしても、自己を弁護し、アリバイ証明を書きつづる精神には、驚くべきものがある。

Moi seul. Je sens mon coeur et je connais les hommes. Je ne suis fait comme aucun de ceux que j'ai vus; j'ose croire n'être fait comme aucun de ceux qui existent.⁽¹⁶⁾

「わたしひとり。わたしは自分の心を感じている。そして人々を知っている。わたしは自分の見た人々の誰ともおなじようには作られてはいない。現在のいかなる人ともおなじように作られていないとあえて信じている」

Me voici donc seul sur la terre, n'ayant plus de frere, de prochain, d'ami, de société que moi-même.⁽¹⁷⁾

「こうしてわたしは地上でたったひとりになってしまった。もう兄弟も、隣人も、友人もいない。自分自身のほかにはともに語る相手もない。」

この二つの断章は、前者は『告白』の第一章にあり、後者は、絶筆となった『孤独な散歩者の夢想』の冒頭部分である。ここに語られているのは、晩年のルソーの窮地へ追いこまれた孤独感であり、諦念といってもよいひとつの境地である。自画像をえがきたいという願望は、世間との異和感や、迫害されているという意識が原因となっている。ルソーは人一倍sensibleな人間であったし、自己のレゾン・デートル（存在理由）を求める意味でも、自己の本当の姿を披瀝しなかったのだろう。それまでに類をみない自伝を執筆することは、ルソーにとっては明確な文学的意図であり、彼のひそかな野心であったはずである。この企ては孤独な生活の中で、ひたすら自分の過去に沈潜し、記憶のひだを想起しつつ行なわれた。直接的な執筆動機は、信頼していた友人たちのルソー批判、（ヴォルテールの有名な小冊子『市民の見解』など）や、官憲の追放な

どの事実に対して、すべてを弁明しようとしたことであつたと思われる。

ルソーの自伝作品の主なものは、『告白』以前にも、自伝的な断章⁽¹⁸⁾はあるが、やはり、作品の完成度からいって、次の三部作であるといえよう。

1) 『告白』(Les Confessions) —— 死後発表のつもりで、1766年ごろから、1770年末にかけて各地に放浪しながら執筆し、朗読会をやった記録はあるが、出版は死後4年たった1782年であつた。2部12巻の編年体構成で、伝記上の事実と、文学としての虚構が混然として作品化されている。

2) 『対話：ルソー、ジャン・ジャックを裁く』(Dialogues, Rousseau juge de Jean Jacques) —— 『告白』完成後、1772年から、この奇妙な題の作品を4年かかって書きあげた。全編を通じ、被害妄想にみちたものであるが、自己を裁くということで自分の真の人間性を分析している。世間の代表者「フランス人」とルソーが対談し、ジャン・ジャックを裁くという形式の一風変わった自伝作品である。

3) 『孤独な散歩者の夢想』(Les Rêveries du promeneur solitaire) —— 1776年から78年にかけて書かれ、ルソー最後の作品である。病的な妄想もなくなり、エッセー風に書き上げられた内的観想の記録である。サン・ピエール島の生活描写は、名文といつてもよい記述である。静かな心境を語るルソーの晩年の姿が彷彿としてくる。

晩年のルソー、すなわち、1766年以降は、作品の系列からみて《自己表出の時期》と規定できるであろう。

私は、これらの自伝三部作を題材として、「connotation」へ至る読解をしてきた。素直な感想として、私自身は『夢想』に一番深い感銘を受けた。具体的な事件は描いていなくても、10編の「散歩」に叙述されている文章は、種々雑多の経験を内的に帰納し高めた内実を持っている。『告白』と同じエピソードが出てくるが(例えば、第4散歩の「リボン事件」)

この『夢想』においては、事実をのりこえた理想主義者の観想へ純化されている。自己にこだわりつづけたルソーは、散歩と植物採集という自然の舞台の上で、やすらかな自己省察のうちに、最後の自分の姿を見出したのであった。ルソーは『告白』において、一生という時間の経過の中で自分を見、『対話』においては二人の人間に語らせることで、体系としての自己を検討し、『夢想』においては、意識の流れに自己を見出したといえるであろう。いいかえれば、三つの方法論で、自己分析を試みたのである。『夢想』の第5散歩で次のように叙述するルソーは、近代文学における自我の問題と実存主義的認識を予告している。

Mais s'il est un état où l'âme trouve une assiette assez solide pour s'y reposer tout entière et rassembler là son être, sans avoir besoin de rappeler le passé ni d'enjamber sur l'avenir; que celui (sentiment) seul de notre existence, et que ce sentiment seul puisse la (âme) remplir tout entier:⁽¹⁹⁾

「しかし、魂がそこにすっかり休息できるほど堅固な地盤を思い出し、そこに自らの全存在を集中して、過去を呼びおこす必要もなく未来を思いわずらう必要もないような状態。……私達が存在するという感情だけがあって、その感情だけが魂の全存在を満たすことができる。」

De quoi jouit-on dans une pareille situation? De rien d'extérieur à soi, de rien sinon de soi-même et de sa propre existence, tant que cet état dure on se suffit à soi-même comme Dieu.⁽²⁰⁾

「このような境地にあって人は何を楽しむのか？ 自己外部にあるなにもものでもなく、自分自身と自分の存在以外のなにもものでもない。この状態がつづくかぎり、人はあたかも神のように自分だけで充足した状態にある。」

自己と直面し、自己の現実存在にめざめ、そして、自己の正しい姿を

人々に示すこと。——これが、ルソーの基本的認識と情熱であった。この意味で、ルソーは、まさしく告白文学の創始者であるといえるであろう。ルソーの自伝作品は、いずれも〈虚〉と〈実〉を超えたところがあり、内なる魂の叫びとして我々に訴えてくるのである。現代の我々にとって、「ルソーを読む」ことの意味は、まさにこの点にあるのではなからうか。

私は、ルソー読解を通じて、文学における自我の問題および表現形式としての告白のあり方の問題に興味を抱いた。この小論では、それらを論じる余裕はないが、この論考をひとつの導入部として考えていきたい。

Notes

- (1) マルチン・ブーバー著『我と汝』(Ich und Du)
田口義弘訳 (みすず書房) P.6
- (2) René Descartes: *Discours de la méthode*.
(J. Vrin 1967) P. 6
(和訳) ルネ・デカルト著『方法序説』野田又夫訳P.12
- (3) *Discours sur les sciences et les arts*.
- (4) *Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes*.
- (5) *Julie, ou la nouvelle Héloïse*.
- (6) *Du Contrat social ou principe du droit politique*.
- (7) *Emile ou de l'éducation*.
- (8) *Les Confessions*.
- (9) *Dialogue, Rousseau juge de Jean-Jacques*.
- (10) *Les Rêveries du promeneur solitaire*.
- (11) G. Lanson: *Histoire de la Littérature Française*. P. 467
- (12) *Correspondance générale de J-J. Rousseau*.

- (13) Jean Starobinski: *J-J. Rousseau, La transparence et l'obstacle*, (Gallimard) P. 10
(和訳) スタロバンスキー著『透明と障害』(松本勤訳) P. 6
- (14) *Mon portrait* (2) [Pleiade 版 I-P. 1120]
- (15) J-J. Rousseau: *Oeuvre complètes* (tome 1).
(Bibliothèque de la Pléiade)
- (16) *Les Confessions*. Ibid. P. 5
- (17) *Les Rêveries du promeneur solitaire*. Ibid. P. 995
- (18) *Fragement biographique*. (1755)
Mon portrait. (1976)
Quatre lettres à Malesherbes. (1762) etc.
- (19) *Oeuvre complètes* (tome 1) P. 1047
- (20) Ibid. P. 1048